

## ウィリアム・ウィリスの墓と遺言書

尾 辻 省 悟

鹿児島大学名誉教授

(前鹿児島大学医学部臨床検査医学講座教授)

## The “Tombstone” and Autographical “Will” of William Willis

Shogo OTSUJI, M. D.

Emeritus Professor of Kagoshima University

(Former Professor of Dept. of Laboratory Medicine, Faculty of Medicine, Kagoshima Univ.)

ウィリスの父親は赤髪で、Red Georgeと呼ばれ、7人の子供のうち5番目（四男）がウィリアムであった。  
ウィリスは天保8年（1837）5月1日北アイルランドのファーマーナ州 Enniskillen（エニスキレン）郊外の Maguiresbridge



ウィリアム・ウィリス（マンマスにて）

“Red George” Willis of Moneen

- 1) George, Doctor
- 2) Anne
- 3) Simon Armstrong, Fleet-Surgeon R.N.
- 4) James Armstrong  
Hannah William George Sara  
Willoughby
- 5) William, Doctor
- 6) Elizabeth
- 7) Hannah

図1. Moneen の George Willis 一族



写真1. Enniskillen の郊外

に生れた。エニスキレンは湖沼が点在する美しい町で、Island of Kathleen という愛らしい名前に由来する。一方、エニスキレンの名前は英国陸軍の二つの有名な連隊につけられている。すなわち、Inniskilling Fusiliers 連隊と Inniskilling Dragoons 連隊である。勇敢でしかも大胆なアイルランド魂の伝統を偲ばせる名前でもある。

エニスキレンの町の中心部をぬけ、水路のある小さな橋を越えて4、5軒目のところに、女性下着物の縫製の仕事をされている Miss Seaman の家があった。ウィリスの兄 James の末子 Sara (1881~1965) は Miss Seaman の家に身を寄せておられ、1965年(私が訪ねた4年前)に死亡されたという。なぜもう少し早くエニスキレンへ来なかったのかと残念でならなかった。慈悲心の深い真の淑女であったと長い間 Sara と起居を共にしていた老婦人 Miss Seaman は私にしみじみと語った。Sara はウィリスの事を直接知る唯一の人だったのである。Miss Seaman は Sara からウィリスの事を聞かされてはいたが、私からウィリスの話を知り、そんな立派な業績を残した人であったのかと、心から驚いた様子であった。

Miss Seaman はすでに高令であられたが、訪ねた翌日、彼女自ら軽自動車を運転して、初めてウィリスの通った教会や墓を探しあてることが出来た。墓は marble arch の傍の教会の裏庭に見付かった。立派な石造りの墓には図2のような墓碑銘が刻まれ、Moneen の George Willis 一族を偲ぶよすがとなっていた。墓の一隅に Miss Seaman と一緒に花輪を捧げた。Chestnut の並木の美しい小径の奥に、蔦の深い彼の終焉の家もあった。それらは、エニスキレンの南西、南はアイルランド王国との国境をなす丘陵地帯の麓にあたる。土地の古老がいまだに Willis' Lane とよぶ草原の小径もそこにあった。ウィリス終焉の家、兄 James の Lisdeevan House は、その息子 William Willoughby へ相続され、さらに Wallace 氏へ売却された。家は当時のままであると Wallace 氏は私に語った。今は又、別の家族が住んでいるという(ウィリスの御令孫 河内浩志氏による)。ウィリスが日本から持ち帰った品々は目を奪うばかりで、エニスキレンやマンマスなどの血筋を引く人々の家に眠っていた。孟宗竹の弁当箱、金色燦然たる兜、写真帳、極彩色の木版画、唐傘、草履、足袋、手紙…など、ウィリスその人に身近かにふれる思いであった。



写真2. Miss Seaman (右)



写真3. Sara

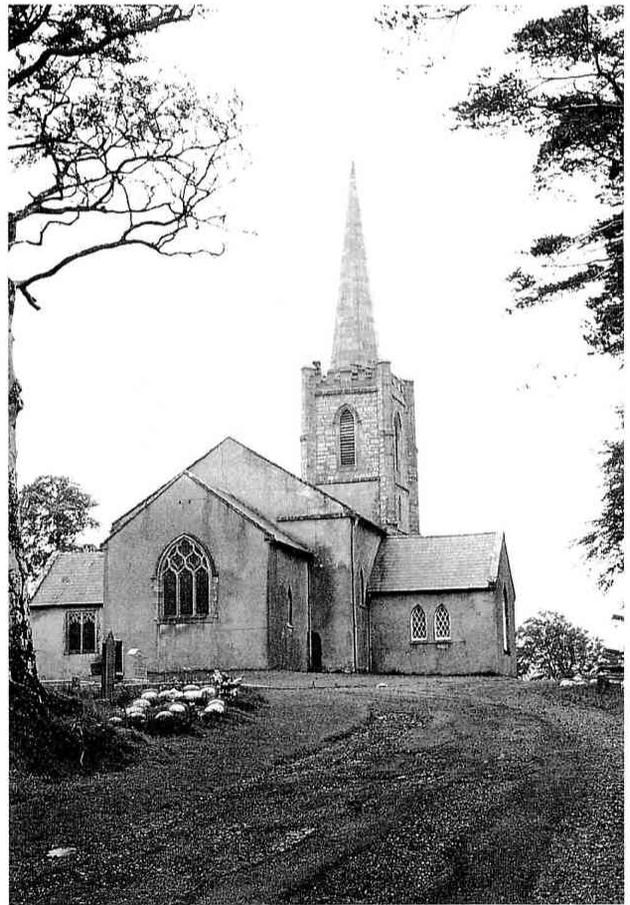


写真4. ウィリスの通った教会



写真 5. ウィリスの墓と Miss Seaman



写真 6. ウィリスの墓

百数十年も前、しかもその存在すら明確に出来なかつたであろう未知の国、日本とシャムに生きて30年余、誰れしも容易になしえないであろう尊い足跡を残した医師ウィリスは、すでに55才の齢を迎え、バンコクで重病の床にあった。兄 James に宛て明治25年（1862）6月14日付でバンコクで書かれた遺書は、彼の生の人間の姿をそのまま伝えており、読むものの胸を打つ。遺書は Miss Seaman の家から見付かったが、James の娘、Sara が持って来たものと思われる。人の一生の終焉に当って書かれた遺書を公開することには、私としてはなんとなく抵抗があったが、偉大な医師としてばかりでなく、偉大なればこそ一人の生の人間ウィリスを伝えたかったという切な願いからのみである。ウィリスは、日本に残した江夏八重（Yaye Koka）との間に出来た男子 Albert（当時ロンドン在住）の将来を心配し、彼の幸せのためにどうすべきかを考えに考えぬいている心情が切々と伝わってくる。Albert と八重は、遺書にこめられた人間ウィリスの苦悩と愛を知っていたのであろうか。

明治26年のクリスマス休暇をエニスキレン郊外 Moneen, Blacklion の兄 James の家 Lisdeevan House で過していた

SACRED  
TO THE MEMORY OF GEORGE WILLIS  
OF MONEEN

Who died 15th August 1874 aged 73 years.  
 And also his wife Hannah Willis who  
 Died 22nd December 1878 aged 67 years.  
 Also their son William Willis, M.D., Edin.  
 F.R.C.S.E.  
 Who died 15th Feby 1894 aged 57 years.  
 Also their daughter Hannah, died 12th Oct  
 1894 aged 48 years.  
 And their son James Armstrong Willis  
 Died 27th April 1909, aged 74 years.  
 Also their daughter Anne Willis,  
 Died 29th Feby 1910 aged 80 years.  
 Also Sarah Jane, wife of James Armstrong Willis  
 Died 10th May 1918 aged 77 years.  
 And their daughter Elizabeth died April 4th  
 1925 aged 80 years.  
 Also William Willoughby Willis, son of  
 James & Sarah Jane Willis, of Moneen  
 Died 16th July 1955.  
 Also his sister, Sara Willis,  
 Died June 13th 1965.

図2. Moneen の George Willis 一族の墓碑名



写真7. ウィリス終焉の家の入口

が、病 (bilious fever) は重篤となり、明治27年 (1894) 2月14日兄の家で57才の生涯を閉じた。わが国そしてシャムで受けた栄誉は、彼の Orbituary を載せた Brit Med J., 441, Feb. 24, 1894 および Lancet, 507, Feb. 24, 1894 に述べられている。ロンドンに一人残された息子 Albert は、ロンドンの Polytechnic を卒業後、一事 Baxter 家とともにオーストラリアへ渡航した。帰国して大学へ入学する予定であったが、父の死にあい断念。ロンドンで書記の仕事につくことを余儀なくされてしまった。のち再び単身オーストラリアへ行き、東京に母八重が健在であることを聞き、シドニーから明治39年 (1906) 4月母を尋ねて来日、横浜埠頭での感激の母子再会となったのである。Albert がロンドンで如何に苦勞したかは、伯父 James に宛てた手紙から明らかである。25才に成長し、Baxter 家に住む Albert は、酷寒のロンドンで煖炉も私室も与えられず、苦しい日日を過している様を切々と訴えている。

アイルランドと日本、当時は幽明さだかならぬ霧の彼方にけむるお互いの国であったに違いない。青年医師ウィリス



写真8. ウィリスの終焉の家 (Lisdeevan House, Blacklion, Moneen)



写真9. ウィリス終焉の家 (Lisdeevan House, Blacklion, Moneen)

を日本へと駆け立てたものは、果して何であったろうか。私はファーマーナ州の丘を越え、草原をよぎってウィリスの跡を尋ね歩いた。毎日農家の古老達と膝を交えて話し合い、ウィリスのことを伝え歩いた。すっかり馴染になった村の古老は、「昔のアイランド人は勇敢で冒険好きだった。もうここの人達でウィリスを知るものはない。だが、その人こそ a man and a half, 真の Ulsterman (アイランド人) さ」と胸を張った。彼が勇敢で、しかも偉丈夫であったことは、当時の彼の風貌を伝える写真から容易に想像することができる。ウィリスは極めて人なつこい性格で、優しくユーモアに富み、滑稽な仕草をするエピソードをマンマスの Oak House の周辺の古老の方々から聞いた。遺書にある Oak House も当時のまま残っていた。

人の一生は夢幻抱影、彼の故郷アイランドにウィリスを知る人はない。しかし、a man and a half 一人と半人前もある好漢という表現にぴったりする Ulsterman, 人間ウィリスはわれわれの心をとらえて離さない。彼の一生は、進取の気性に富んだ一 Ulsterman が、日本の黎明期の歴史に刻んだ荘大なロマンといえるだろう。



写真10. Oak House

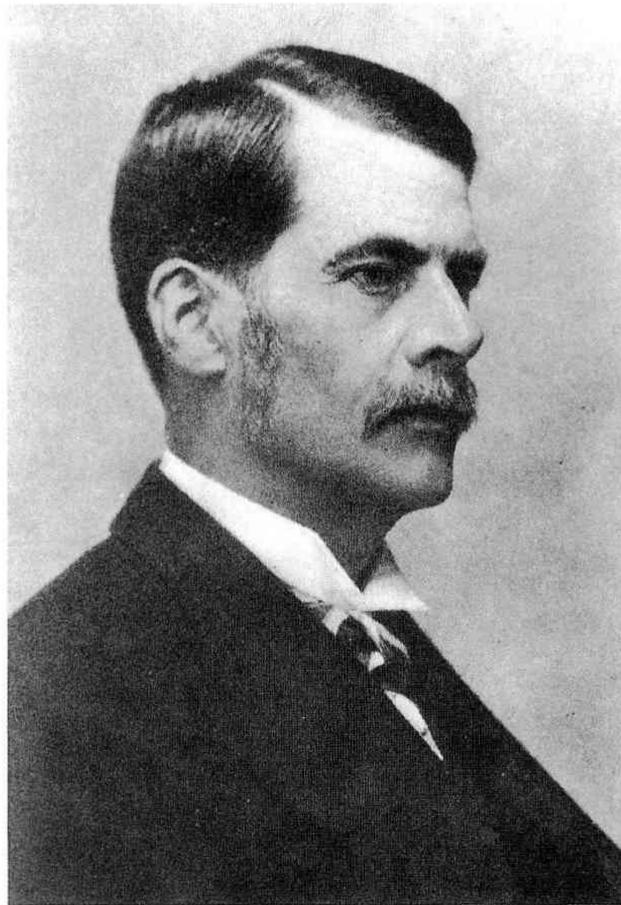


写真11. Ernest Satow

遺書の通りに事が運べば、James から Ernest Satow へ、そして James から夫々の人々へ指定された遺産が渡る筈であった。それがウィリスの意志であった。しかし残念ながら、Albert は James から Satow からそのような連絡についぞ接することはなかった (Albert の言)。八重にも渡ることはなかったといわざるをえない。百年も前、遠く隔絶されたお互いの国で、個人の遺産を譲渡することなど殆んど不可能に近い事であったろう。そして又、当時両国には混血に対する強い偏見があったことも一つの大きな障害となったのであろう。

Albert はのち日本に帰化して宇利有平を名乗る。現在、ウィリスのお孫さん (宇利有平の子供さん) 御二人が健在であられる。1. 河内まり代さん (大阪府豊能郡豊能町)、河内浩志さん (まり代さんの御子息: 金沢市、国立石川工専、助教授)、ほかに御二人の御令嬢がおられる。2. 宇利丞示さん (兵庫県西宮市)、宇利俊彦、光示さん (いずれも丞示さんの御子息) である。

ウィリスの墓碑銘は、離別したまま他界したウィリスが、遥かに遠く Albert と八重二人に向って、一人の人間としての「自分の生きざま」、苦悩そして愛を切々として語りかけているようであった。

[Moneen の George Willis 一族の詳細については、マンマスやウェールズ地方を含めて広く血縁の方々に関する調査が必要と思われる。ウィリスの兄弟姉妹の図1は、あるウィリス血縁の一家からの資料であるが、墓碑銘とは可成り違ったものとなっている。その理由は不詳であるが、あらかじめ御諒承いただきたい。しかし遺言書に出てくる兄 George や Simon などの名前が墓碑銘に出てこないのは、死亡時 Moneen (の一定の教会) に登録されていなかったとの理由からであろうか。なお、ウィリスの死去の日が墓碑銘 (教会) では15日、その他では14日となっているが、どちらが正しいか今後に委ねたい]。